

京伝・馬琴・一九と『糸桜本町育』

中尾和昇*

要旨

本稿は、浄瑠璃『糸桜本町育』（紀上太郎作、安永六年「一七七七」三月初演）を共通の典拠とする読本・合巻作品を対象に、その利用方法の検討を通して、登場人物の評価を明らかにするものである。取り扱う作品は、『東男連理緒』（十返舎一九作、文化六年「一八〇九」刊）、『糸桜本朝文粹』（山東京伝作、同七年「一八一〇」刊）、『糸桜春蝶奇縁』（曲亭馬琴作、同九年「一八一二」刊）の三作で、いずれも綱五郎に対する評価が高い一方で、花咲・お房・左七・小糸の四人については、評価が分かれる傾向にあることがわかった。また、京伝・馬琴には先行作品の趣向や人物描写を取り入れる姿勢も見られた。

キーワード 浄瑠璃 読本 合巻 人物造型 趣向

はじめに

文化九年刊の馬琴読本『糸桜春蝶奇縁』^①は、浄瑠璃『糸桜本町育』^②（紀上太郎、安永六年三月初演）を典拠とするが、馬琴流の勸善懲悪観に基づきつつ、大幅な変更が施されている。その詳細については、大屋多詠子「馬琴の演劇観と「勸善懲悪」に詳しい。それによれば、(1)「御家騒動の手法を借りながらも、主家における忠臣悪臣の二項対立を提示せず、敵役を矮小化したこと」(2)「浄瑠璃には見られない主人公らの肉親を創出し、その悪行を端緒とした因果で物語を構成したこと」の二点にまとめられよう。また、筆者も不道德の是正という観点から、二人の妻（お房・小糸）を娶った左七の重婚を回避させたことを明らかにした。^③

ただ、以上のような変更を、彼一流の小説作法として評価するためには、周辺作者、とりわけ山東京伝の著作と対比させる必要があるだろう。

この点について、筆者はかつて、浄瑠璃『恋娘昔八丈』(松貫四・吉田角丸、安永四年八月初演)を典拠とする両者の作品を、登場人物の描かれ方に着目して論じたことがある⁽³⁾。ここでは、秋月一角・喜蔵・お駒といった人物に対する評価に関して、両者に明確な差異が認められることを指摘したが、こういった現象を捉えるためには、より多くの作品を組上に載せた比較研究を蓄積していくほかない。

管見の限りでは、『糸桜春蝶奇縁』のほかにも、合巻『東男連理緒』(十返舎一九、文化六年刊)と『糸桜本朝文粹』(山東京伝、同七年刊)において『糸桜本朝育』の利用が見られる。そこで本稿では、旧稿と同様の方法を用いた比較研究をおこなう。そのうえで、京伝・馬琴・一九の演劇利用に関する私見を提示したい。

一 『糸桜本朝育』について

まずは『糸桜本朝育』(以下『本朝育』)の概要について、簡単に整理しておく。本作は、江戸本町二丁目の糸屋姉妹(お房・小糸)と左七(神原左五郎)、姉妹の兄中根屋綱五郎と傾城花咲のそれぞれの恋愛に、赤城家の重宝小倉色紙の紛失騒動をからめて描いた作品である。少々長くなるが、梗概を以下に記す。

神原左五郎は御家の重宝「小倉の色紙」を預かっていたが、山住五平太に盗まれてしまう。糸屋の中根屋綱五郎は三浦屋の遊女花咲に溺れて勘当されていたが、母妙閑と妹お房にめぐり会い許される。五

平太の伯母岩藤は、小糸が左五郎と共謀して色紙を盗んだことを責め、左五郎の子を妊娠している小糸に堕胎薬を飲ませようとしますが、それを察知した中老尾上が薬をすり替えて事なきを得る。かえって岩藤は毒薬不法入手の罪で追放され、小糸は養父石塚弥三兵衛が引き取る。幫間の左七となった左五郎は、綱五郎に花咲の身請けに必要な金を貸し、その代償として色紙の探索を頼む。ところが、綱五郎は色紙を取り戻そうとして五平太を殺してしまう。お房は吉原見物に来て左七に一目惚れする。左七はお房の婿となる。そこへお房の妹小糸が弥三兵衛に伴われて来る。左七は姉妹と関係を持ったこと、綱五郎を罪人としてしまったことを悔い、書き置きを残して出奔、小糸も後を追う。綱五郎は家へ迷惑のからぬよう再び勘当を受ける。花咲を連れ去ろうとする半時九郎兵衛を追った綱五郎は、九郎兵衛から色紙の質札を手に入れ、花咲と落ち延びる。花咲は実父の茂治作を頼る。茂治作の後妻となっていた岩藤は、花咲を松葉いぶしで責め苛み、綱五郎の居所を聞き出そうとするが、綱五郎が来て救い出す。小糸と左七の隠れ家へ伯父の十兵衛がお房を連れて来る。綱五郎も来て、弥三兵衛が岩藤を召し捕って来て、犯人が五平太と判明する。左七は帰参し、お房・小糸は本妻・妾と決まる。糸屋は綱五郎が相続する。

評判記『義多百鼻眞』(安永六年刊)に「綱五郎うらない者となり奥山の所、糸やの母妙閑綱五郎の身の上を聞、次ニわざと知らぬふりにての見へ面白事」。夫より編笠を取れハ我子故驚く所よし」「屋敷の段も面白事」「行徳村の段岩藤の扇花咲をとらへ綱五郎の在家を

白状させんと松葉いぶしにせらるゝ所、にくていにてよし」「綱五郎捕手との仕やい、弥惣兵衛扇(扇)に繩をかけ来り、岩藤か白状により綱五郎ハ糸屋の見せ相続の所迄出来ました」と評されているように、浅草地内の段、赤城屋敷の段、下総行徳の段、小石川隠家の段などが評判をとったようである。以上を踏まえ、三作品の分析を進めていく。

二 十返舎一九『東男連理緒』

一九合巻『東男連理緒』(以下『東男』)は、文化六年に村田屋治郎兵衛から刊行された作品である。版元の村田屋は、寛政七年刊の黄表紙『初日影七福即生』以来、一九との親交が深く、彼の代表作となつた滑稽本『道中膝栗毛』シリーズの生みの親でもあつた。一九が近松東南門の浄瑠璃作者・近松余七であつたことは夙に知られている。中村幸彦「十返舎一九論」によれば、一九戯作には浄瑠璃から趣向や素材を借り来つてることが多く、それらは「新しいまた当時現に上欄されるもの」が選ばれているところに特徴があるという。この点について播本眞一「東男連理緒」は、同年に刊行された一九合巻『反讎恋友猿』(丸屋文右衛門版)が、同五年四月十三日より中村座で上演された(お俊伝兵衛もの)の歌舞伎『近頃河原の達引』堀川の段を当て込んだものであると指摘している。また、同四年六月二十日より市村座の二番目狂言として上演された『本町育』の作替が当たりをとりたよう、『東男』はこれを当て込んだ可能性が考えられる。

本作は『本町育』の世界に沿いながら、種々の改変が施されている。播本解説が指摘するように、俳人其角のエピソードを付加した点が注目されるが、主要登場人物の性質や役割には変化が生じており、そのことによる筋の改変も見逃せないところである。とりわけ五平太・九郎兵衛・岩藤・綱五郎・花咲・小糸・左七・お房については、大幅な改変が施されている。

①山住五平太・半時九郎兵衛・岩藤

山住五平太は赤城家の悪臣。糸屋の娘小糸に横恋慕するが、恋敵の左七を邪魔に思い、半時九郎兵衛に御家の重宝「定家卿の小倉色紙」を盗み取らせる。その後、色紙を取り戻そうとする綱五郎と斬り合いになるが、「喉笛」を貫かれて死ぬ。同じく悪人として登場する半時九郎兵衛は、五平太殺害の様子を盗み見て、綱五郎が刀の血を拭いた襦袢の片袖を持ち帰る。後日、その片袖で綱五郎を脅し、恋心を抱いている遊女花咲を奪つて身請けするが、あとを追いかけて来た綱五郎との斬り合いの末に討たれる。

両者ともに、色紙を取り戻そうとした綱五郎に殺害されるという点で共通しており、小悪党といった印象を受ける。むしろ本作で中心をなす敵役は、五平太の伯母岩藤であろう。色紙紛失の容疑で禁制の墮胎薬を小糸に飲ませようとしたり、五平太を殺した綱五郎の居場所を言わせるために義理の娘花咲を松葉いぶしで責め苛んだり、悪逆非道の振る舞いを見せる。

一方『東男』では、五平太・九郎兵衛・岩藤の役割に変化が生じている。五平太は左七¹⁾が御用金三百両を盗んで花咲を身請けしたと讒言するが、佐左衛門(左七の父、原作の佐右衛門)は同役にも罪があるとして五平太を追放する。恨んだ五平太は佐左衛門を殺害して赤木家の家宝である小倉の色紙を盗む。その後、小石川で小糸を奪いに来るとも失敗、左七と綱五郎に討たれる。九郎兵衛は、岩藤の許に身を寄せている花咲を我が物にしようとするも失敗。換金しようと武家に持ち込んだ色紙がすり替えられていたことが発覚し、五平太と同様に討たれる。

結論から先に述べれば、二人は主人公たちが討ち果たすべき敵役に格上げされたと見てよいだろう。とくに、五平太による佐左衛門殺害は、本作を敵討物として再構成するための重要な変更と言える。それに対して岩藤は、松葉燻しの場面こそ描かれるものの、五平太の伯母という立場ではなくなり、色紙をめぐる騒動には一切関与しなくなる。

② 綱五郎・花咲

綱五郎は本町糸屋の息子で、遊女花咲とは相思相愛の仲。花咲の身請けに必要な百両の金を左七に肩代わりしてもらおうかわりに、色紙を取り戻そうとするが、五平太を殺害してしまう。四段目では、五平太殺害の罪を負った綱五郎に対して、母妙閑と伯父十兵衛が苦言を呈する様子が描かれている。その後、綱五郎は九郎兵衛をも殺害してしまいい、色紙探索を頼んだ左七は責任を痛感して身替りになろうとする。

最終的に綱五郎は色紙を取り戻すことに成功するのだが、そこに至るまでの苦悩や葛藤は本作の眼目の一つとなっている。

一方『東男』では、先述したように綱五郎による五平太・九郎兵衛殺害は描かれず、それにとまなう苦悩や葛藤も見られない。むしろ綱五郎には、窮地を救うヒーローとしての役回りが窺える。例えば、糸屋へ帰る途中の小糸を五平太が襲うが、綱五郎は遅れ馳せながら駆けつけて追い払う。また、花咲が松葉いぶしの責めを受けて棺桶に入れられた際には、虫の知らせによって察知して窮地を救う。このような綱五郎の性質は、序文に「本町綱五郎・半時九郎兵衛といへる男作の事跡をつぐり合せしなり」(傍線筆者、以下同)²⁾と記すことから窺える。『本町育』においても男伊達な側面は点描されていた(「頼れた小倉の色紙。取り帰す迄は男の意地」「花のお江戸の本町生れ」)が、『東男』においてそれが具体化された見てよいだろう。なお「本町綱五郎」という名前は、歌舞伎『本町育浮名花婿』(安永六年五月初演)から取り入れたものである³⁾。

また、遊女花咲についても変化が見られる。綱五郎を一途に恋慕い、九郎兵衛からの身請け話に苦悩する様子は共通しているが、『東男』には積極的な行動に出る花咲が描かれている。綱五郎によって棺桶から救出された花咲は、小石川の左七方に預けられていたが、小糸と間違えた五平太に捕まる。五平太の隠れ家で九郎兵衛と再会した花咲は、偽って肌を許して酒に酔わせ、色紙を取り戻すことに成功する。

小倉の色紙の虚実を正さんと思案を極め、道ならぬ事ながら、九

郎兵衛の心に従ひ、真実にもてなし、肌身を許させ、ついに誑し
賺して、かの色紙を奪ひ取り帰りしなり。

それを聞いた綱五郎は、「小倉の色紙取り返す手立てのためにせし事、
少しも苦しからず。不義いたつらといふにあらず」と語り、花咲の行
動を称賛する。花咲は身請けの金を肩代わりしてくれた左七に「大恩」
を感じており、色紙を取り戻すことが恩返しに繋がると思つたため、
このような行動に出たのであった。なお、花咲は松葉いぶしの責めに
あつた時、岩藤に「割り薪」で打ち叩かれて気絶し、棺桶に入れられ
るも息を吹き返すのだが、この趣向は、同じく『本町育』を典拠とす
る歌舞伎『心謎解色糸』(鶴屋南北、文化七年正月初演)において応
用されている。すなわち、糸屋の悪番頭佐五兵衛が毒酒でお房を仮死
させるが、「雨水」⁽¹⁾が喉に入り、綱五郎が「口うつし」で飲ませた気
付け薬によつて蘇生するというものである。

③小糸・左七・お房

左七は小糸と密通して子を身籠らせたが、綱五郎に色紙探索を依頼
する代わりに、お房と結婚して糸屋を継ぐこととなる(お房は左七に
一目惚れしていた)。養父石塚弥三兵衛とともに糸屋を訪れた小糸は、
左七が姉のお房の妻となっていることを知つて嫉妬心を燃やす。左七
は書き置きを残して出奔、小糸も後を追う。二人は小石川の長屋に身
を隠す。お房を連れてやってきた十兵衛は小糸に対し、お房が悲しみ
のあまりに泣き腫らして、眼を潰してしまったことを明かし、左七を

引き渡すよう説得する。二人は心中を決意するが、お房と十兵衛に止
められる。落着後、左七はお房・小糸を妻妾とする。

『本町育』は(小糸左七もの)の名の通り、小糸・左七にお房を加
えた男女の三角関係の有様が軸となつており、欠かせない要素の一つ
である。ところが、『東男』では右に記したような恋模様はまったく
描かれず、お房の嫉妬と怪異という、原作にはない独自のエピソード
が挿入されている。それは次のようなものである。

敵の行方を探るべく、左七が小糸とともに家を出たため、残された
お房は綱五郎から二人の関係を知り、悲しみのあまり重病に臥す。其
角(綱五郎・お房・小糸の伯父)は「我息あるうちに今一度左五郎様
に会ひたき」というお房の願いを叶えるべく、小石川に隠れ住む左七
を呼び寄せる。お房は死後、怨霊となつて左七につきまとい、産婆に
化けて小糸の生んだ赤子を食い殺してしまう。其角は「因果の道理」
を説き、「根の国へ帰る桜の名残かな」の句を手向けて、お房を成仏
させる。

お房が左七に一目惚れするのは原作と同様だが、彼女は妻となつて
迎えられるのではなく、其角の許で左七と忍び合う関係となつている。
また、小糸と左七の不義が問題となることについても原作と共通する
が、本作において二人の恋は正当化されて、対してお房の恋が不当な
ものとなつてしまう。小糸と左七の関係を知つたお房は、

さあならば、小糸が縁深し。なまなか馴れ初めて思ひまさり、切る
にも切られず途方に暮れて胸を燃やせども、いかにとすべきや

うなく、今は早せんかたなし。妹の恋人とも知らずして思ひ初め相馴れしは、この身の因果と昼夜眼も合わず、思ひ続けて泣き明かしけるが：

とあるように、左七との恋が叶わなかったことを「この身の因果」と言い聞かせている。いわば、お房は「因果」の名のもとに命を落としたのである。やや強引な方法ではあるが、原作において、お房・小糸が左七の妻妾となったことに対して、一九自身、何らかの問題を感じていたのかもしれない。

以上、主要登場人物に焦点を当てながら、『東男』の改変方法について見てきた。まず、五平太・九郎兵衛を途中で死なせることなく、討ち果たすべき仇敵とした点が挙げられる。それにもなつて、綱五郎や花咲の性質にも変化がみられた。また、原作にみられた小糸・左七・お房の恋模様は描かれず、お房の嫉妬と怪異という独自のエピソードを挿入することで、やや強引ながらも小糸・左七の恋を正当化することにも成功した。このような登場人物の性質や役割の変化は、色紙の紛失・奪還という筋を基本線としつつも、原話の情話的色彩を抑え、敵討物として再構成するためになされたものといえよう。ただし、一九の合巻作品を見渡してみると、演劇の筋をそのまま踏襲するケースはそれほど多いわけではない。例えば、前年刊の『桑名屋徳藏廻船噺』は歌舞伎『桑名屋徳藏入船物語』(並木正三、明和七年十二月初演)と外題が近似しているにもかかわらず、その内容には大きな

懸隔が見られる⁽¹⁵⁾。この点については、稿を改めて検討したい。

三 山東京伝『系桜本朝文粹』

京伝合巻『系桜本朝文粹』(以下『本朝文粹』)は、文化七年に西村屋与八より刊行された作品で、序文に「文化六年己巳三月稿了⁽¹⁶⁾」とあるように、前年三月には脱稿していたようである。ただ、六丁表に「追加文」と題する京伝の再識があり、「文化六年己巳秋八月」と記されていることから、三月から八月までの間に、変更が加えられた可能性も否定できない。棚橋正博「解題」が指摘するように、本作も『本町育』の筋が全編を支配しているが、小三・金五郎・笠屋三勝といった情話の男女を新たに登場させるなど、大幅な改変が施されている。また、『東男』からの影響も垣間見える。

① 御家騒動物

先述したように、『本町育』『東男』ともに色紙の紛失・奪還という筋を基本線としているが、御家騒動物に見られるような、悪臣による御家の横領、若殿の放蕩、忠臣の艱難辛苦、といった描写は見られない。五平太・九郎兵衛にはそのような目的はなく、恋敵への意趣返しとして色紙を盗んだままである。一方『本朝文粹』では、悪臣による御家横領の陰謀が前面に押し出され、それにもなつて、中心をなす敵役も五平太・九郎兵衛から村雲典膳・岩藤左衛門へと変化してい

(18)

村雲典膳・岩藤左衛門は佐々木判官の執権。忠臣石塚淀兵衛（原作の石塚弥三兵衛）を殺害し、佐々木家の重宝「小烏丸の太刀」（家督相続に必要）を奪い取る。その際、事前に六十六部と虚無僧（判官の妻尾上の前が嘗む報謝宿に宿泊していた）を殺害しておき、彼らの衣服に着替えてから犯行に及んだのであった。二人は最終的に淀兵衛の子綱五郎・久我之助によって討たれ、太刀も元に戻り、判官の息子花若丸が家督を継いで一件落着となる。

対して二人の悪人はどうなったか。五平太は「山住屋ろ平太」という名の俄分限として登場。久我之助の妻お舟に恋心を抱き、風の神犬右衛門・淡島猿助・大黒舞の蟹兵衛（原作の風の神喜左衛門・淡島権兵衛・大黒舞植右衛門）を仲間にして奪おうとするが失敗、俠客金屋金五郎に殺害される。色紙の一件にこそ関与していないが、役回りは原作と同様である。また、金五郎の台詞に「これはしたり。殺す気ではなかつたに、誤つて人殺しとなつたる後悔さよ」「我、人殺しの罪とならば、後に残る母人は、誰あつてか養ふべき。これ大いなる不孝なり」とあり、ろ平太殺害に対する罪の意識が見て取れる。このことから、原作における綱五郎の役割は金五郎が担うようになったと考えてよいだろう。両者には男伊達という共通点もあり、京伝の周到な人物設定が窺える。

一方、九郎兵衛は「闇の黒平」という名の盗賊として登場する。綱五郎から色紙を奪つて三百両で売却。悪臣二人の悪事に加担して多額

の金を得てからは「半時黒平」を名乗る。犬右衛門らを手下に従え、金に飽かして花咲を口説くも靡かないので、彼女の娘小蔓を人質に取つて脅す。その後、綱五郎が糸屋の手代となっていることを聞きつけて潜入するも、綱五郎・久我之助の手で返り討ちにあう。五平太と同様、黒平の役回りも原作とほとんど変わらない。ただ、黒平が色紙を盗み、売却した目的は、かねてより恋慕していた花咲を身請けする金を得るためであった（綱五郎の台詞に「扱は色紙を質に入れ。身受の跡金渡したな」とある）が、本作では大金を得て遊廓に通い、ここではじめて花咲に思いを寄せるようになる。

水野稔「京伝合巻の研究序説」⁽¹⁹⁾が、「敵討物を吸収した陰謀物の世界の確立と演劇的手法の定型に向つての進路の決定したが、文化七年であつたといえる」と指摘するように、京伝合巻は陰謀物すなわち御家騒動物を主題とするようになる。五平太・九郎兵衛に代わつて典膳・岩藤を事件の首謀者とするのも、この時期の特徴と言えよう。このような傾向は、旧稿で論じた悪人秋月一角を悪党の首領とする『今昔八丈揃』（文化九年刊、以下『八丈揃』）の特徴と類似している。ただ、典膳・岩藤は序盤に登場して以降、終盤までまったく姿を見せず、首謀者のわりには地味な役回りである。むしろ京伝としては、ろ平太・黒平の方にこそ悪人としての魅力を感じていたのではないかと推測する。この点、『八丈揃』の秋月一角は終始物語に関与しており、首謀者としての本領を発揮しているといえよう。

② 役割の相互交換

綱五郎は石塚淀兵衛の次男「石塚綱五郎」、花咲は下関の遊女「葛城」として登場する。葛城は綱五郎の子供を身籠るが、彼が色紙を紛失したことにより、生き別れとなってしまう。子供を産んだ後、花咲の名で五条坂の遊廓に勤めるが、祇園社で売卜者となっていた綱五郎と再会。桜花の紋所を象った櫛こそ綱五郎が間夫である証拠と替された花咲は、二つに折って綱五郎との縁を切ったことを明かすが、それは娘小蔓を取り戻すための方便であった。しかし、小蔓は黒平の人質となつて自害してしまう。その後、二人は左七・お房と名を変えて糸屋の世話になつていたが、左七は糸屋の娘小糸に好意を寄せられる。小糸は阿野谷十兵衛との縁談を苦に思い、左七と出奔すべき手紙をさせたため、それを手代の李四郎に取られる。お房が機転を利かせて李四郎を酔わせ、手紙を探すが出てきたのは淀兵衛自筆の色紙の写しであった。祝言の日、綱五郎は十兵衛と李四郎が密談しているのを不審に思い様子を窺う。二人の話によれば、十兵衛の正体は兄の淀太郎で、綱五郎に家督を継がせるべく、紛失した色紙を手に入れようと、糸屋の婿となつて潜入していたのであった。また、李四郎は淀太郎の来家で、糸屋の手代となつて情報収集にあたっていた（糸屋の主人柳兵衛が色紙を手に入れていたことなど）。その後、久我之助たちが糸屋を訪れ、兄弟三人が揃つたと思いきや、淀太郎・小糸は自害。二人は典膳の実の子供で、腹違いの兄妹であった。

梗概が少々長くなったが、以上から窺える綱五郎・花咲・小糸の変

化について考えてみたい。その最も大きな変化として、綱五郎・花咲と左七・お房を同一人物とした点が挙げられる。これにもなつて、それぞれが本来持つていた役割の一部が、別の人物に賦与されることとなつた。また、先述した『東男』の影響かと思われる部分もある。以下、登場人物ごとに確認していく。

綱五郎は佐々木家に仕える石塚淀兵衛の息子として描き直されるが、これは赤城家に仕える神原佐右衛門の息子左七の役割を受け継いだもので、色紙紛失が綱五郎の落度となつたのもこのためである。また、十兵衛と名を変えていた兄淀太郎が綱五郎に対し、「此家の小糸と不義なすは、さては眞の放埒者」と言つて非難する場面がある。十兵衛といえ、原作では綱五郎たちの伯父に当たる人物で、「姉髯の左七と色事して。内を欠落するといふやうな又こんな素早い性の悪い女子が。此広い江戸中にま一人と有ル物じやないはいや」と言つて、不義を犯した小糸を非難する場面があつた。叱る相手こそ異なれ、綱五郎と左七を同一人物として描いたことによつて生じた変更と言えるだろう。

花咲は葛城と呼ばれていた頃に綱五郎の子を身籠るが、これは左七の子を身籠つた小糸の役割を受け継いだもので、こちらも綱五郎・左七を同一人物として描いたことにもなう変更である。また、お房と名を変えるものの、原作におけるお房の役割は皆無で、それはむしろ後述する小糸に託されることとなる。本作の花咲は『東男』と同様、積極的な行動に出る女性として描かれるのが大きな特徴である。黒平

から綱五郎との仲を疑われた時には、「あのやうな働きのない業の悪い、因果な貧乏者とながつては此身の破滅。今日からお前に見かへる印」と言つて愛想づかしをする。「愛想づかし」とは、男が探し求めていた宝物を手に入れるために、女が心にもない悪態をついて縁を切ろうとすること、「縁切」ともいう。²⁰ 女の真意を理解できない男が怒つて、殺しに発展するのが定石とされるが、本作ではそのような展開とはならない。なお、『心謎解色糸』にも愛想づかしが描かれているが、こちらは定石通り、左七によるお糸（深川仲町の芸者）殺害へと発展する。²¹ その後も、小糸の手紙を取り返すために杢四郎を巧みに「あやなす」のだが、このような行動は「手管に馴れた」花咲ならではものである。

小糸は「美男なる姿に恋慕して、明暮れ心を悩ましける」とあるように、左七となつた綱五郎に一目惚れする。これは、俄狂言の席上で左七に一目惚れしたお房の役割を受け継いだものだが、原作のお房が左七の妻となつて結ばれるのに対し、本作の小糸は刀を刺して自害する結末となる。この点、『東男』のお房とよく似ている。ただ、「因果」という曖昧な理由で済ませた『東男』とは異なり、本作では、典膳という「敵の血筋」であるにもかかわらず左七を恋慕ってしまったこと、腹違いの兄と関係を持つてしまったこと、すなわち小糸の不義とその理由としている。彼女にとつて自害は、「畜生の真似事」をしてしまった自身に対する「天罰」だったのである。以上から、本作の小糸は原作のお房・小糸の性質を同時に有する人物として描き直された

のではないだろうか。

以上、『本朝文粹』に見られる原作からの改変や『東男』との類似箇所について確認してきた。まず、典膳・岩藤による御家横領の陰謀を全編を統括する枠組みとし、そこに淀兵衛殺害に起因する敵討を組み込み、御家騒動物として再構成した点に大きな特徴が見られる。五平太・九郎兵衛を敵役としただけの『東男』とは大きく異なる。ただ、首謀者のわりに典膳・岩藤の存在感は希薄で、構成上の問題点を抱えていることも事実である。つぎに、登場人物間で役割の一部を相互交換した点が挙げられる。これを可能にしたのは、綱五郎・花咲と左七・お房を同一人物としたことである。また、綱五郎・お房・小糸の兄妹関係を解消することで、小糸・左七・お房による三角関係の恋模様も描かれない。この点、『東男』によく似ている。このほかにも、さまざまな改変が見られるが、紙幅の都合上省略する。

ところで、ここまで『八丈揃』や『本朝文粹』といった演劇の筋を基盤とする京伝合巻の検討をおこなってきたが、両者ともに演劇的趣向を用いた改変がおこなわれている点で共通する。『八丈揃』では「もどり」「身替り」が、『本朝文粹』では「愛想づかし」が、それぞれ用いられている。また、『本朝文粹』で綱五郎・花咲と左七・お房を同一人物としたことについては、歌舞伎役者における一人二役が想起される。ただ、このような演劇づくしともいふべき改変方法が、京伝合巻の特徴であるかどうかは、なお検討を要する。

四 曲亭馬琴『糸桜春蝶奇縁』

徳田武「解題」⁽²⁾によれば、『糸桜春蝶奇縁』(以下『春蝶奇縁』)は『本町音』の初段・三段目・四段目・八段目の筋を取り入れつつ、「馬琴特有の緻密な因果律にのっとって新たに再構成」したものだということ。ここでいう「緻密な因果律」とは、前掲大屋論文が指摘する一八の怨霊を端緒とする因果のことで、馬琴流の勸善懲惡観による緊密な構成が注目される。ただ、登場人物の性質や役割の変化に関しては、論じ尽くされていないように思う。前章までの検討をふまえ、あらためて『春蝶奇縁』の改変点について検証してみたい。なお、五平太・九郎兵衛等の悪人については、大屋論文に詳しいため省略する。

文化五年刊の馬琴読本『雲妙間雨夜月』⁽³⁾奥付の近刊予告に、「一俠」⁽⁴⁾は小糸・お房を指し、当初は綱五郎と二人の「赤繩」(夫婦の縁)を描く予定だったようである(前掲徳田解題)。ところが、実際には綱五郎・お房、左七・小糸という二組の男女が結ばれる結末となる。事実、本作末尾に「虞舜の聖にあらざりせば、堯の二女を取て、妻となすをよしとせんや。狭五郎思ひ誤りて、小糸と夫婦になるときは、又その姉を娶るに由なし」とあるように、馬琴は姉妹を妻妾することに否定的な見解を示している。結論から先に述べれば、このような構想の変化は、先述した合巻二作に触発されたものと思われる。

先に示した『春蝶奇縁』末尾の続きには、「綱五郎と阿絵のみ、其

行状に疵瑕なきもの也。よろしくこれを賞すべし」とある。これは、綱五郎・お房の恋を正当なものと認める一方で、左七・小糸のそれを不当なものとするべき、という認識を示したものと見える。このように、いずれか一方の恋に軍配を上げるのは、『東男』『本朝文粹』にも見られた。『東男』では小糸・左七の恋を正当化するために、お房を嫉妬心の強い女性として病死させ、『本朝文粹』では綱五郎・花咲の恋を成立させるべく、小糸を不義を犯した人物として自害させたのである。鼻屑にする男女の違いこそあれ、それぞれの方向性は『春蝶奇縁』と共通しているのではないか。ではなぜ、馬琴は綱五郎・お房の二人を「行状に疵瑕なきもの」と捉えていたのだろうか。

まず鍵となるのが、近刊予告にあった「一俠」という綱五郎の形容である。⁽⁵⁾「一俠」は義侠心に厚い性格のことで、男伊達とも称される。馬琴は本作執筆以前から、綱五郎を男伊達と認識していたようだが、それをいち早く具体化したのが一九の『東男』であった。後述する要素から、綱五郎の人物造型に『東男』からの直接的な影響は見られないものの、綱五郎＝男伊達というのは共通認識だったようである。

馬琴は後年、『著作堂旧作略自評摘要』(天保十五年成)において、綱五郎を「義侠の大勇」⁽⁶⁾と称賛している。これは、盗賊山魅伍平太に囚われた小糸を救うため、単身賊寨に潜入して伍平太らを懲らしめたことに対する評価である。このような綱五郎の「義侠」については、内田保廣「馬琴の俠―開巻驚奇俠客伝」⁽⁷⁾以前に詳しい。それによれば、綱五郎は武芸好き・弱者保護・自己犠牲の三点を兼ね備えて

おり、『南総里見八犬伝』以前において、最も完成された馬琴の「侠」だという。これだけでも十分に「行状に疵瑕なきもの」と言えるが、さらに馬琴は、綱五郎の出自をも改変する。賊寨襲撃の噂を聞いた十兵衛（糸屋の番頭）が苦言を呈するが、対して綱五郎は自身が豊嶋信盛という「やんごとなき武士」の「血絡」であり、現在のような商人となったのは、祖父三郎の代からだと明かす。そして、そのような血筋にある自身が、商売人としての生業を嫌い、武芸を好むのは、「脱れがたき因果」であると言う。馬琴が血筋を重んじることはよく知られている。筆者も「血合わせ」という趣向を通して、そのことと言及してきたが、正統な血筋の人間であることも、「行状に疵瑕なきもの」とするために不可欠な要素といえよう。

一方、お房はどうだろうか。本作のお房は、五十四塚東六郎と曙明の姉娘「小草」として登場する。許婚の神原狭五郎の許に向かう途中で海難に遭うも木嬰（一八の前妻）に救われ、「大総」と改名して糸屋に養われる。その時、大総は綱五郎との結婚を勧められるが、「尼になるべき願ひあり」と言って拒否する。また、狭七との結婚を求められた際にも、「いひがたき情由侍り」と言つて断る（狭五郎と狭七が同一人物だと認識していないため）も綱五郎に押し切られ、ついには自害を図ろうとする。ところが、狭七が落とした扇が婚礼の引出物として渡したものであったので、彼が許婚の狭五郎であることがわかる。その際、大総は

わらはには親と親が、云号たる夫あり。国隔ればあひもせず、見

もせぬからに棄られたれど、一旦夫と定めつる、操をわれから破らじ、とおもひし故に他人と、婚縁を結ばじとて、それとは告ず推辞しかども、脱れかたくて狭七主と、ひとつ臥房に入るものから：

と語る。このように、大総は貞節を重んじるゆえに苦悩する女性として描かれている。先に示した近刊予告の「貞」は、このことを指している。原作にお房の「貞」を表現したものは見られないが、彼女は十兵衛や綱五郎たちから認められた「花嫁」であり、馬琴はこのことを重く見たのであろう。対して左七・小糸の關係は、「媒妁なしの野合」（獸糞師水右衛門「実は扇谷家臣岩藤尾乃右衛門」の台詞）という厳しい評価となっている。

また、小石川の隠家に来た大総は泣き腫らして「盲目」となっているのだが、それは左七を恨んだことではない。大総が

絳の起りは壻を嫌ひし、阿総が心一つより、出たりといはれては、なくなり給ひし木嬰尼の、高き恩恵に背くべく、この世にしては親と憑む、且開等へ面おせなり。か、ればわらはがうへのみならず。そがま、に彼人の、往方しらずは存命かたし。

と語るように、狭七を狭五郎と知らずに嫌つてしまったことが、木嬰や且開に対する不孝につながることを知り、後悔の念を抱いたためである。つまり、大総は「貞」だけでなく「孝」も兼ね備えた女性なのである。管領山内憲政の「東六郎が長女総とやらんは。孝烈愛たき女子なり」という台詞はこのことを指している。なお、大総の眼病は

原作の色紙に相当する「一文字羽織」から発する光によって平癒する。

このように、馬琴が綱五郎・お房を「行状に疵瑕なきもの」としていたのは、彼らが本来持っていた「侠」や「貞」といった性質を原作から見出したためであろう。では、この二人を結びつけるものは何なのか。この点については旧稿でも指摘したが、本文末尾に

阿総に贈りし刀子は、小鞘に金の胡蝶あり。且その日、阿総が漫に筆を染て、狭五郎に贈りし扇は、桜貝を詠る古歌なり。これによりて彼を思へば、この婚縁と、のはず、小鞘の胡蝶を名にしおふ、翻蝶丸が妻となるべき、その祥こ、に見れたり。

とあるように、「胡蝶」と「桜」の縁によつて二人は夫婦となったのである。ただ、これは馬琴独自のものではなく、先述した『本朝文粹』の趣向を応用したものではないか。

綱五郎との関係を白状させようとする黒平に対し、花咲は「コレ此櫛をかう折れば、綱五郎が定紋の桜を散らし、落花再び枝に上らず、間夫の縁切る投櫛は、お前に立つる私が心中」と言つて綱五郎との破縁を強調する。本文にそれとは記されていないが、おそらく綱五郎から贈られたものであろう。『本朝文粹』では黒平の脅しを回避するための小道具としてしか用いられていないが、馬琴はこれにヒントを得て、「名詮自性」（登場人物の名前に性格や運命が託されていること）を体現する趣向として発展させたのである。

綱五郎・お房を手放して称賛する馬琴であったが、左七・小糸には厳しい評価を下している。小石川の隠家における十兵衛の台詞に「恩

義に背く狭七が逐電、其をそ、のかせし和女郎（小糸―筆者注）が淫奔」とあるように、狭七は「逐電」、小糸は「淫奔」が問題視されている。

狭七の「逐電」とは、小糸を連れて出奔し、小石川の長屋で身を隠すという、原作の第四段・第五段・第八段における出来事を指す。このような行動をとった狭七に対し、且開は「不実男」、十兵衛は「白物」と言つて批判する。これは、綱五郎から受けた恩を省みない、狭七の義理を欠いた行動を問題視したものである。ただ、「存命ては義に背く、恥を忍ぶもしほしが程。何の里にも身を躲し、翻蝶丸の消息を、聞定て後にともかくも」とあるように、この出奔は綱五郎の様子を探るためであり、それが「義に背く」行動であることを、狭七は十分に承知していた。

そもそも、狭七が小糸と関係を持ったのも、止むに止まれぬ事情があつてのことである。まだ狭五郎と名乗っていた頃、狭七は主君憲政から小糸を迎え取る役目を命じられる。憲政には扇谷朝興の娘との結婚が予定されており、それを理由に断ろうとするが、主君の激怒を恐れて、やむを得ず了承する。その後、小糸が東六郎の妹娘「止以子」だとわかるや、父矢所平の遺言（「彼（小糸―筆者注）妻々しくてひとりをらば、小草とおもふて妻にせよ」）を思い出し、小糸とともに出奔するのである。ただ、「切るに断られぬ奇縁と恩義。孝ならんとすれば忠ならず、忠に進めば不孝なり」とあるように、狭七は「忠」と「孝」、すなわち主君の命令に従うべきか、親の遺言を守るべきか

で苦悩しており、苦渋の選択であったことがわかる。また、彼がこのような決断を下したのは、「扇谷とわが君と、故なく婚姻整ひて、両家和順に榮給はゞ、身のぬれ衣は厭ふに足らず」とあるように、山内・扇谷両家の繁榮を願つてのことであつて、「ぬれ衣」を着せられることも覚悟の上であつた。その後、団円に至つて、憲政より「淫奔の咎ありといへども、その過失は予より出たり」と謝罪され、狭七の出奔は正当な行為として認められたのである。

このように、馬琴は出奔という筋は残しながらも、抜き差しならぬ理由を設定することで、狭七を読本の主人公にふさわしい人物に描き直したのである。なお、文化五年刊の馬琴読本『三七全伝南柯夢』においても、主人公の半七が三勝の素性を知つて出奔するという、ほぼ同様の展開が見られる(前掲徳田解題)ことから、浄瑠璃の主人公を改変するための一方法だつたようである。

小糸の「淫奔」については、且開が「他の夫をその夜の夜の中に、そのかしてもろ共に、逃かくる、淫奔ものは、世に又多かることには侍らず」と語るように、他人の夫でありながら、その男を唆して出奔したことが問題となつており、原作の設定と大差ないように見える。しかし、狭七と出奔する際には「女々しく患苦に迫りて、志を得も果さず、獲かたき衣(一文字羽織―筆者注)を他に任して、死して忠義になるよしありや」と言つて自害を制止しており、確固たる意志を持った女性であることがわかる。対して原作の小糸は、「連て退のが嫌ならばとても覚悟を極めた此身。お前の手につけ今こゝで、殺してたべ」

とあるように、狭七との恋にしか目が向いていない。また、原作の小糸は「お屋敷の御法度」に背いて不義を犯したことが重大な過失となつていた。小糸の養父石塚弥三兵衛の台詞に「町人の身分ならばな。早速智よ舅よと。取結びも有ルべきに。刀指身の情なさ」とあるように、武士と町人の恋愛は認められておらず、それが左七と小糸の恋を阻んでいたのである。この点について、馬琴は小糸を糸屋の娘から東六郎という武士の娘とすることで身分差を取り払い、先述した狭七との「奇縁」によつて小糸の恋を成就させるのである。

以上、『春蝶奇縁』における綱五郎・お房、左七・小糸の人物造型について検討してきた。馬琴は当初、綱五郎と小糸・お房の「赤繩」を描く予定であつたが、『東男』『本朝文粹』に触発され、綱五郎・お房の恋に軍配を上げるべきという認識を抱くようになった。それは、原作から綱五郎・お房の「侠」や「貞」といった性質を見出すことができたからであり、二人を「行状に疵瑕なきもの」と捉えることに繋がる。それゆえに、彼らを「胡蝶」と「桜」の縁によつて結ばれる運命としたのである。一方で、左七・小糸に対しては、原作での道ならぬ恋を問題視しており、本来持つていた二人の身分や性質を改変することとなつた。このような人物造型の違いは、その行末にもあらわれている。すなわち、綱五郎は武士として五十四塚・神原両家を再興させ、狭七は町人となつて糸屋を継ぐのである。なお、二組の男女が結ばれる結末とすることが可能となつたのは、綱五郎・お房・小糸の兄妹関係を解消したためであり、『本朝文粹』の手法にヒントを得た可

能性が考えられる。

おわりに

本稿では、京伝・馬琴・一九の読本・合巻作品における『本町育』の利用方法について、登場人物の描かれ方に着目して考察してきた。

一九合巻『東男』では、色紙の紛失・奪還という原作の筋を踏まえつつも、全体を敵討物として再構成すべく、五平太による佐左衛門殺害のエピソードを挿入したことが、大きなポイントである。だからこそ、登場人物の性質や役割を大きく変化させる必要が生じた。続く京伝合巻『本朝文粹』では、悪臣の陰謀を全編を統括する枠組みとし、そこに淀兵衛殺害に起因する敵討を組み込み、全体を御家騒動物として再構成している。そのため、五平太・九郎兵衛に代わって典膳・岩藤を中心をなす敵役としている。また、綱五郎・花咲と左七・お房を同一人物として描き直すことで、登場人物間で役割の一部を相互交換することが可能となった。そして馬琴読本『春蝶奇縁』では、原作の敵役を矮小化し、全体を肉親の悪行を端緒とする因果で再構成している(前掲大屋論文)。そのうえで、綱五郎・お房を「行状に疵瑕なきもの」として称賛し、「胡蝶」と「桜」の縁によって結ばれる運命にある男女とした。その一方で、左七・小糸は不義を犯して出奔した「不実者」「淫奔もの」であるため、身分や性質を改変することで、読本の主人公にふさわしい男女へと描き直した。

以上の利用方法から浮かび上がってくるのは、原作の登場人物に対する評価の一致と相違である。結論から先に述べれば、綱五郎はいずれの作品においても評価が高い一方で、花咲・お房・左七・小糸の四人については、評価が分かれる傾向にある。

花咲は『東男』『本朝文粹』ともに評価が高く、積極的な行動に出る女性として描き直されている点で共通している。一方『春蝶奇縁』においては、大総・小糸の母曙明として登場するが、彼女のとつた行動―一八との心中未遂で生き残ったものの、一八を弔うこともせず東六郎の後妻となる―が一八の怨念を呼び起こし、子供たちを苦しめる。馬琴が原作の花咲をこのように描き直したのは、遊女との婚姻を不貞としていたため⁽³⁰⁾で、とりわけ実生活でも遊女を妻としていた京伝との立場の違いは明白である。対してお房は、『東男』『本朝文粹』ともに評価が低い。『東男』では嫉妬により身を滅ぼし、『本朝文粹』ではお房の性質を受け継いだ小糸が、自身の不義によって自害するのである。お房をこのような女性として描いたのは、小糸・左七の関係がすでに構築されているなかで、彼女の一目惚れがそれを掻き乱してしまつたからではないだろうか。一方『春蝶奇縁』では、「貞」「孝」に優れた女性としており、合巻二作とは正反対の評価となっている。

左七は、『本朝文粹』『春蝶奇縁』ともに小糸との道ならぬ恋が問題となつているが、前者は綱五郎と同一人物にすることで、後者は身分や性質を改変することで、それぞれ主人公たるにふさわしい人物として描いている。対して小糸は、『本朝文粹』だけが救われない女性として描

かかれている。なお、『東男』には小糸・左七の評価がはっきりと示されていないため、不明とせざるを得ない。

読本・合巻において、浄瑠璃の登場人物がいかなる評価を与えられていたのか、本稿はその一端を明らかにしたに過ぎない。ただ、京伝・馬琴に加えて一九の作品を組上に載せることで、これまでとは違った知見を得ることができた。例えば、京伝・馬琴には先行作品の趣向や人物描写を取り入れる姿勢も見られた。今後は、式亭三馬や柳亭種彦といった戯作者たちの作品も視野に入れながら、京伝・馬琴の演劇利用について考察を進めていきたい。

注

- 1 大屋多詠子『馬琴と演劇』（花鳥社、二〇一九年）。
- 2 拙稿「巷談もの」における主人公像の変容（同『馬琴読本の様式』清文堂出版、二〇一五年）。
- 3 拙稿「京伝・馬琴の演劇利用―『恋娘昔人丈』を典拠とする作品をめぐる―」（『日本文学』六九・八二（二〇二〇年））。
- 4 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第七巻 人形浄瑠璃』（三二書房、一九八三年）。
- 5 『本町育』の改作である『江戸自慢恋商人』^{えとじまんこいあきんど}について、『義多百虫貞』は「是小倉の色紙か紛矢のおこり。同じ事にも本町育のほうがよほど面白見えへます」と述べ、『本町育』に軍配を上げている。
- 6 中山尚夫「十返舎一九研究」（おうふう、二〇〇二年）。
- 7 中村幸彦「中村幸彦著述集 第六巻」（中央公論社、一九八二年）。
- 8 棚橋正博ほか編『早稲田大学所蔵合巻集覧 上』（青裳堂書店、二〇二一年）。文化六年刊の役者評判記『役者大学』下「中村歌右衛門」（東京藝術大学附属図書館所蔵、貴重書[F73/Y164.118]）には、「四月中旬より堀川場の猿廻し与次郎を成され候て又大当りにして江戸中一統に悦び出し」とある。なお、同年刊の馬琴読本「句殿実実記」^{くいでんじつじき}も「お俊伝兵衛もの」を典拠としており、戯作者の間で共有する題材であったものと思われる。
- 9 伊原敏郎「歌舞伎年表 第五巻」（岩波書店、一九六〇年）。
- 10 田川邦子校訂『叢書江戸文庫』¹⁵ 江戸作者浄瑠璃集（国書刊行会、一九八九年）。なお、文字譜の引用は省略した。
- 11 『東男』では一貫して「左五郎」と表記されているが、煩雑さを避けるため、本稿ではすべて「左七」と表記する。
- 12 鳥居フミ子編『台湾大学所蔵 近世芸文集 第五巻』（勉誠社、一九八六年）。引用に際しては、読み易さを考慮して、仮名書きの語句を漢字に置き換え、適宜、句読点等を補った。
- 13 早稲田大学演劇博物館所蔵の初演時の辻番付（220007-040）には、「本町綱五郎 広次」と記されている。その後、本作は寛政十年六月に江戸中村座にて二番目狂言として上演されており（注10前掲書）、一九が直接参照したのは後者である可能性も考えられる。
- 14 浦山政雄編『鶴屋南北全集 第三巻』（三二書房、一九七二年）。
- 15 播本真一「^{玄圃五郎兵衛}復讐西海観」（注8前掲書）。

- 16 山東京傳全集編集委員会編『山東京傳全集 第八卷』(べりかん社、二〇〇二年)。振り仮名は適宜省略した。
- 17 注16前掲書。
- 18 岩藤左衛門は悪女岩藤からの命名だが、関連するところが皆無であるため、別個のキャラクターと見るべきである。
- 19 水野稔『江戸小説論叢』(中央公論社、一九七四年)。
- 20 阿部優蔵『縁切』(服部幸雄ほか編『新版歌舞伎事典』平凡社、二〇一一年)。
- 21 濱田啓介「(愛想づかし)概観」(同『近世文学・作者と様式に関する私見』京都大学学術出版会、二〇二二年)は、愛想づかしに二つの型があることを指摘し、多くの用例を挙げて検証している。
- 22 鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成 第十四巻』(汲古書院、二〇〇五年)。本文の引用も同書による。引用に際しては、適宜振り仮名を省略し、句読点・鉤括弧等を補った。
- 23 鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成 第七巻』(汲古書院、一九九七年)。
- 24 大屋多詠子「糸桜春蝶奇縁」(国文学研究資料館・八戸市立図書館編『読本事典』(笠間書院、二〇〇八年)は綱五郎を「最も美化した」人物として捉えているが、その理由については触れていない。
- 25 神谷勝広・早川由美編『馬琴の自作批評―石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』―』(汲古書院、二〇一三年)。
- 26 『藝文研究』36(一九七七年)。
- 27 拙稿「読本・合巻における趣向の往還―「血合わせ」を手がかりに」(注2前掲書)、同「血合わせ」再考―京伝・馬琴の諸作品をめぐる―」(読本研究新集)13、二〇二二年)。
- 28 田中則雄「浄瑠璃の読本化に見る江戸風・上方風」(同『読本論考』汲古書院、二〇一九年)。
- 29 馬琴は読本「夢想兵衛胡蝶物語」「色欲国上品」(文化七年刊)において、「男女の非礼を野合といふ。この故に、娶るには必まづ媒まををもてす」と述べている。引用は、鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成 第十二巻』(汲古書院、二〇〇二年)に拠る。
- 30 大屋多詠子「馬琴と忠臣蔵」(注1前掲書)。
- 〔付記〕本稿はJSPS科研費(若手研究 課題番号:18K12301)における成果の一部である。

Abstract

How to use *Itozakura-Honcho-Sodachi* in the works of Kyoden, Bakin, and Ikku

Kazunori NAKAO

This article examines how to use the *Joruri* (ballad drama) *Itozakura-Honcho-Sodachi* (written by Kīno-Jotaro, first performed in March 1777) as a common source for *Yomihon* (one type of fantastic novel) and *Gokan* (one type of illustrated novel). After that, we will clarify the evaluation of the characters in each work. The works adopt in this article is *Azumaotoko-Renrino-Itoguchi* (written by Jippensha Ikku, first published in 1809), *Itozakura-Honcho-Bunzui* (written by Santo Kyoden, first published in 1810), *Itozakura-Shuncho-Kien* (written by Kyokutei Bakin, first published in 1812). In all of these works, Tsunagoro is highly evaluated, while Hanazaki, Ofusa, Sashichi, and Koito tend to be evaluated differently. In addition, Kyoden and Bakin's works also show an attitude of incorporating the tastes and character descriptions of previous works.

Key words : *Joruri* (ballad drama), *Yomihon* (one type of fantastic novel), *Gokan* (one type of illustrated novel), character molding, device

